

横山拓也／咲くやこの花インタビューvol.18

横山拓也(よこやま・たくや)【平成 30 年度 文芸その他〔劇作・演出〕】



いかにも人好きのする柔和な笑みを浮かべつつ、「人間のダークサイドな部分に惹かれる」と話す、横山拓也さん。小気味良い関西弁のセリフ回しを用い、何気ない日常の会話劇から人間の矛盾に満ちた言動や本音をあぶり出す。関西を拠点に、今もっとも活躍が期待される劇作家・演出家の一人です。「消耗しにくい演劇作品」を標榜し、全国各地で再演ツアーを積極的に実施。何より彼の作品に「出演したい」と手をあげる役者も少なくなく、2018 年は自身の演出に関わらず、各地で 11 本の横山戯曲が上演されました。1977 年、大阪府出身。1996 年、大阪芸術大学在学中に劇団「売込隊ビーム」を結成、以降 2011 年まで作・演出を務める。2012 年より個人ユニット「iaku(いあく)」主宰。日本劇作家協会会員(関西支部運営委員)。伊丹想流私塾 5 期生。主な受賞歴は、2009 年『エダニク』で第 15 回劇作家協会新人戯曲賞、2013 年『人の気も知らないで』で第 1 回せんだい短編戯曲賞大賞、2017 年『ハイツブリが飛ぶのを』で第 72 回文化庁芸術祭新人賞(関西参加公演の部)、『ハイツブリが飛ぶのを』『肅々と運針』で第 54 回大阪文化祭賞奨励賞、2018 年「咲くやこの花賞」など。これまで「リアルな世界を覗き見するような世界を作っている」と思っていた。でも、違っていた」という横山さん。咲くやこの花賞の授賞式から数日後、注目の劇作家に“現在地”を伺いました。

「他人の言葉を寄せ集めてはじめて自分は“こういう作家だ”と言えた」

本日は、確定申告の手続きで帰省中のところ、お時間を割いて頂き恐縮です(笑)。現在は東京にお住まいなんですね。

そうなんです。妻の両親が東京で40年以上営んできた食堂「きさらぎ亭」を妻が継いだので。彼女が早くから仕込みに出掛けるので、僕は朝から主夫しています。この春から小学4年生になる長男の朝食を作ったり、10時までは掃除や洗濯などの家事をして、その後は近くの図書館で執筆します。妻の定食屋も近いのでランチはそこで済ませて、また図書館に戻って19時ぐらいまで仕事をして。あとは帰ってご飯食べて寝る、みたいな。劇作家にしては、めちゃくちゃ規則正しい生活をしています(笑)。



すべてが徒歩圏内なのですね。ちなみに、きさらぎ亭のおすすめメニューは？

海老クリームフライです。これはかつて外食チェーンの大戸屋が「真似してもいいですか」と聞きに来たほど。現役だった義父が「できるものなら…」と答えたらすぐに再現されたそうです(笑)。ただ、コスト面で採算がとれず、早々にメニューからは外したようです。やっぱり大変なんですね。妻も昔劇団に入っていたので、両親に理解があったのか、きさらぎ亭のアルバイトには役者さんが多いんです。うちは1食まかないが付くので、栄養面でも条件がいいと思いますよ。

ぜひ伺ってみたいです。また、この度は「咲くやこの花賞」受賞おめでとうございます。2月の受賞式では約900人の観客を前に、落語家からヴァイオリニストまで全5ジャンルの受賞者によるミニステージもあり、とても見応えがありました。

めちゃくちゃ緊張しました。ありがたいことに僕自身、去年から受賞が続いていたこともあり場馴れしていたつもりでしたが、やはり違うジャンルの方々と同じ壇上に立つと、現代劇のキャパの小ささを鑑みて萎縮してしまっ。授賞式のチラシをみた友人たちも「ミロコマチコさんがいる！」とか、みんな僕よりも有名人の方々に気を取られていたので(笑)。落語家の高座を同じ舞台上で見るなんて。こんな授賞式があるのかと、初めての経験でした。皆さんとも和気あいあいと過ごせたので、結果的にはとても楽しかったです。

やはり賞を受けるのは嬉しいものですか？



親が喜ぶますね。今回はじめて授賞式の場に親を誘って見たんです。20年ぐらい演劇に携わっていますが、ようやく親にも認められたというか。壇上で挨拶する息子の姿に「この子も成長したな」と思ってくれたと思います。会場の中央公会堂もすごいパワーがあるんですね。はじめてホールに入った時は感動しました。良い会場でやっていただけたなと、しみじみ思いました。

大阪にはどんなイメージをお持ちですか？

僕は大阪生まれですが、小学生から中学2年生ぐらまでは千葉県で過ごしました。多感な時期を関西で過ごしていないので、思春期に改めて大阪を見つめ直したという経験があります。関西ですずっと育ってきたのとは、また違う視点で大阪を見ていると思います。

横山少年の目に、大阪がどのように映ったのか気になります。

他人との触れ合いの仕方が他地域とは違うなという印象は、いまだにあります。中学2年生で大阪に戻って来た時、知らないおばちゃんから急に「お兄ちゃん！」と呼ばれたときは心臓が「どきーん！」となりました。カルチャーショックじゃないですけど、そんな風と呼ばれたことがなかったので(笑)。パーソナルスペースが狭いというか、入り込んで良いところが多いような気がします。

容易に場面が想像できますね(笑)。そんな多感な横山少年は、中学の頃から文章を書くことが好きだったとか。

日直当番が回ってくる度に、学級日誌に小説みたいなものを連載していました。読書感想文も好きで、高校生になるとクラスで2人ぐらい提出しなさいと言われるんですが、2つとも自分が書いてました。それで賞を獲ったり。ただ、アウトプットの仕方をそれ以外知らなくて、演劇や映画の道に進むというイメージはまったくありませんでした。ただ創作したいという思いだけで、学生のときはやっていましたね。

実際、高校ではサッカー部に所属、演劇の脚本・演出は文化祭で書くことがあった程度だったそうですね。進学にあたり、大阪芸術大学を選ばれた決め手は？



その頃は、将来についてぼんやりしていたと思います。書くことを仕事にとまでは考えていなかった。勉強もそんなにできなかったですし、かといって浪人してまで大学へ行くのもなと思っていた矢先、後に一緒に

劇団を立ち上げることになる同級生が大阪芸術大学の存在を教えてくれた。「芸大には文章を学ぶ学科もあるよ」と。親は進学校出身で教育熱心だったので、その期待に応えられない上、芸術系に進みたいと言ったので、余計反対されました。

進路を後押ししてくれたのが、担任の国語教師でした。

高校2年生の時に、母親が「もし彼が文章書く道に進むといったら、反対しないであげてください」と面談で言われていたそうです。そこまで自分が文章が書けるとか、自覚的ではなかったんですけど、お陰さまで芸大に進むことができました。

大学では劇団「売込隊ビーム」の立ち上げに加わります。1996年のことです。

大阪芸術大学を教えてくれた友人が劇団を立ち上げるので、台本を書いてくれないかと頼まれて「面白そうだな」と、最初はそのぐらいの感覚でした。右も左も分からないまま大学1年生のときに台本を書いて、2年生で初めて公演を行いました。

学級日誌の延長のような？

いやー、やっぱりそんなことはなかったです。全くノウハウがなかったから、それこそ高校生の頃に初めて観た劇団「惑星ピスタチオ」とか、エンターテインメントな芝居をやっている劇団の影響を受けて真似してみたり。いまの iaku の活動とは全然違うことをやっていました。



確かに、小説などは読むことで完結しますが、演劇では書いた言葉が台詞となり、役者の身体に動きがつく。初の演劇体験は面白いものでしたか？

全然面白くなかったです(笑)。思い通りにいかないし、演出の経験が全くなかったので何が正解か分からない。役者がやるのが全部正解に見えちゃう。でも俳優は何か言ってもらいたいわけですよね。僕は演出家としての言葉を持っていないですから、台詞を喋ってもらって、役者が楽しそうにやっていたら演劇になってるんじゃないか、ぐらいに思っていました。初めての公演は当時の森ノ宮プロネットホールでやりました。会場をおさえるのに1年前に申請しないといけなかったんですね。そこからどのぐらい稽古したらいいのかも分からず、本番まで1年間ずっと稽古してました(笑)。

演出家の言葉を持たないまま、それでもパツと顔をあげたら役者全員がこちらを見ているような状況で1年…。

苦痛ですよ(笑)。だから最近、高校演劇の審査員とかする機会もあるんですけど、演出の立場にいる子たちが苦しそうにしているのを見ると「分かるよ」と言ってあげたくなる(笑)。多分、実際は役者をやりたかったのに、今は役割としてやってるだけなんだろうなと。僕も今となっては演出家としての言葉もいろいろ身に付くし、何を放棄して何を「分からない」と言っているのかが分かってくる。開き直れる部分がある。でも当時は、全部背負わないといけないのではと思って、ずっと緊張していました。

作・演出の重みが。

そうですね。作品の責任が全部こちら側にあるのかと思ったら、急に怖くなってきた。まあ、それは今でも怖いんですけど。

それだけ苦痛だとして、大学での活動だと卒業をひとつの節目に、「劇団を辞める」という選択もできたのかなと想像するのですが。



当時の大阪芸術大学って、みんなそこまで真剣に就職活動はしてなかったように思います(笑)。とくに劇団メンバーは家が自営業とかそういう家庭環境の人が多くて、そもそも「会社員になる」という発想自体がなかったんじゃないかな。だから僕だけですもんね、就職したの。教育熱心な親の手前、就職ぐらいはちゃんとしとかなきゃダメだなと思ったので。でも、劇団は続けていました。

就職されたのですね。

大学最後の年に大阪市主催「CAMPUS CUP」という、大学生を対象にした演劇コンクールがあり、そこで優勝しました。ここで優勝しなかったら解散しようとは話していたんですけど、獲っちゃったから続けようと。嘘のような本当の話です(笑)。

仕切り直しとともに、作・演出家としてやりたいことが見えてきた？

劇団でやっていた頃は、ずっと苦しんでいました。自分がやりたいと思うことが何なのかすら見えないというか。劇団はそこそこ人気があったんですけど。劇団代表で僕を劇団に誘ってくれた同級生の言葉を借りると、「ずっと文化祭をやってるような状態」だった。20代は内輪で楽しいことをしながら生活しているような感覚でした。

楽しそうにも聞こえますが。

そうなんです。やってる時は楽しいんです。でも周囲から「横山くん、本当は何をやりたいの？」「本当にこんなことやりたいの？」とか、だんだん自分の作家性みたいなのが問われるようになってきた。30代を前に、何でこんなことを長くやっているんだ、この先自分はどうしていくんだろうとか、やっぱり考えるようになりました。会社員でもあったので、軸足がぐらぐらしながら活動していた感じです。



悶々としながらも、劇団時代はどういう作風だったのですか。

劇団は役者の人気がすごくあったので、役者が映えるものがいいだろうと。当時の流行もありシチュエーションコメディのようなものと、僕自身、結構暗めなダークサイドなものが好きだったので。そのふたつをミックスしたアンバランスな作品を作っていました。自分のなかではバランスを取っていたつもりなんですけど、それが周囲から見ると「本当は何がやりたいの？」ということに繋がった。お客さんにサービスしながら、自分のやりたいことをちょっと盛り込むみたいなことでいいの？と、関係者や先輩方から言われ続けて。「それでいいんだ！」と開き直ることもできず、常に自分に言い訳しながら創作していたような部分がありました。

劇団の人气が出れば、求められることにも応えたいですね。

多くの先輩方にも経験があることだと思うのですが、お客さんが求めるものと、自分が求めるものってだんだん乖離してくる。やっぱり成長してくるので。少なくとも、自分が作ったものに言い訳するのはヤダなと思うようにはなっていましたね。

2011 年で劇団は活動休止中に。翌年、個人ユニット iaku(いあく)を旗揚げします。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の時に、自分がノイローゼ気味で体調を崩したこともあり、劇団を休む、辞めるとか言い出して。その時決まっていた4月公演も中止にしたいと申し出たんですけど、結局上演することになりました。だったら、それが終わったら休ませてくれと。その後、劇団を解散するか僕が抜けるかのどちらかにしたいと提案したら、「劇団は残したいから」と、僕が辞めることになりました(笑)。



3.11 の衝撃は作家としての意識も変えたそうですね。

人の痛みとの距離感にすごく敏感になって。そこから最初に書いたのが iaku の旗揚げ公演にもなった『人の気も知らないで』です。作品では震災のことには全然触れてないんですけど、どういうふうに傷ついたひとをサポートしていくか、そこにはどんな気持ちの種類があるのか。そういうことを自分のなかで整理して作品にしました。そうした中で、今までやってきた劇団のスタイルでは自分が書きたいと思う作品はもう書けないかもしれない、と気持ちが変わっていきました。

16 年続いた劇団を離れてみて、どんなご心境でしたか？

1 年ほど劇団をお休みしている間にも創作意欲はあったので、他団体への書き下ろしを始めるようになりました。劇団メンバーとは違う人との作業の中で、本当に自分がやりたいことが見えてきた。個人ユニットを立ち上げてからは、上田一軒さんに演出に入っていただくことも多かったのですが、自分の作品を客観的に言語化してもらうことで、ようやく目覚めたというか。自分はこういうことがやりたいのかなと、11 年から 12 年の間に見つけてきたという感じです。

不思議ですね。自分のやりたいことは、必ずしも自分が一番よく知っているわけではないんですね。

今でもそうなんですけど、「こういう作品を書くぞ」と思って書き出すじゃないですか。でも書き終わっても、これが何たるかが分からない。「何を当たり前のことを書いてるのかな？」とか、思っちゃう。作品に詳しくなりすぎている部分もあると思います。そこで演出家やドラマトルクといった客観的な視点を加えながら、この作品が何モノなのかというところを探っていく。或いは、俳優と稽古しながらこの作品がどういう所にたどり着くのかを探っていく。そういう作業が今すごく楽しいです。

現在、4 月に上演される企画集団マッチポイント公演『ヒトハミナ、ヒトナミノ』の稽古中だそうですね。演出は文学座の松本祐子さんです。



まさに今、この作品が何モノなのか分からない状況に陥っているところです(笑)。演出家たちと一緒に台本を研究しながら「ああ、なるほど」と。もちろん、作品のことを十分に分かっている時もあるのですが。自分のやりたいことってそんな明確に言語化できなくて、他人が言ってくれた言葉を寄せ集めて形を作って、ようやく「僕はこういう作家です」と言えるようになるんだなと。iaku を始めてから分かったような気がします。

「舞台上に登場人物以上の思考が渦巻く、そのライブ感が演劇の醍醐味」

個人ユニット iaku でやりたいことは？

これは簡単に言葉にするのが難しいんですけど。すごく間口の広いことをやっていると思います。会話のお芝居ですし、ユーモアも持ち込んで、誰が見ても理解できるものを作っている。自分たちの生活と地続きの所にある悩み、生きにくさ、葛藤を、演劇というモノの力を使って疑似体験するような舞台だと思います。役者に自分自身を投影したり、その場で自分が一緒に喋っているような感覚になるような作品を作りたい。

感情がダイレクトに伝わる、演劇ならではの醍醐味を味わって欲しいと。

そうなんです。映画とかには何かフィルターがあるような気がしていて。もちろんグッと入り込むものもあるんですけど。とくに 100 席ぐらいの小劇場でやっている、本当に空間の密度がグーッと濃くなっていくのが分かる。お客さんの姿勢がどんどん前のめりになって、舞台上に登場人物以上の思考が渦巻いているように見えてくる。空気が凝縮していくような体験を、最近では自分の作品から感じる時があって。ちょっと言い過ぎかもしれないですけど(笑)。それが演劇をやってて辞められない瞬間というか。また、今まではリアルな世界を覗き見するような作品を作っているのかなと思っていたんですけど、そうではなくて、「立ち会っている」のではないかと思い始めていて。だからリアルに演者と近いところに身を置くことで、より登場人物たちの葛藤を疑似体験できる、ライブ感のある作品を作りたいなと思っています。



ぜひ多くの方に体験してほしいですね。

小劇場では小さな所作で機微を見せますが、劇場が大きくなってもやることは変わらないから、じゃあどうやってそれを伝えるのか。今後は 400 席などの中劇場クラスでもやっていきたい思いもあるので、演出的な手腕も必要でしょうし、演劇をミニマムなもので終わらせないというのは、自分にとっては今後の課題です。賞に甘んじてられないぞ！という思いはありますね。

例えば演出のアイデアなどは、日頃から書き留めておくものですか？

一番簡単なのでスマートフォンのメモ帳を使っています。例えばテレビのドキュメント番組などで気になったことや、演出、シーンのアイデア、台詞などを順不同で書いています。中には「浴衣でブリッジ」とか、後で読み返して「なんだろう？」と思うようなものもあります。その時は、多分女の人が浴衣でブリッジしたらすごいエロスだなと思ったんでしょうね、使ったことないですけど（笑）。そういうくだらないことから社会的な問題まで、思いを馳せたことを、台詞ひとつでも何か使えないかなとメモしています。

ダークサイドな物事に惹かれるという通り、横山さんの作品には精神的、或いは肉体的に大切なものをなくすという、ある種の“欠落”が描かれます。



衝撃的にそこを描きたいというのではないんですけど。誰にでもコンプレックスがあって、例えば顔半分にあざがあるひとが無意識にあざのない側に顔を振って写真に写るとか。本人はそうやって何とかバランス

を取って生きようとはしてるんだけど、やっぱり生きにくさはあるんですよね。そういうことの象徴というか、アウトプットのさせ方として、欠損や欠落といった分かりやすいものを借りて描いている。そこから、誰にでも思い当たるような普遍的なドラマを作っているつもりです。

描きたいのは、普遍性。

隠していたコンプレックスがだんだんあらわになった時に、そのひとの本心や性質みたいなものがにじんでくる。そこでは通したい正義が貫徹できなかったり、生きてると色んな葛藤があつて。誰もが阻害された状態で過ごしているというようなことを舞台に上げることで、それぞれの登場人物に共感したり、思い入れが乗ったり、そういうことが起きるような作品は作れているかなと思うんです。

感じてほしいのは共感や思いやり？

みんなそういうことを抱えながら、それでも明日を生きていくとういか。自分は大丈夫なんだ、許されてもいいんだとか、そういう思いになってもらえたら良いなと。最近は前向きに書いていますね。昔はもっと救いのないような話も多かったんですけど。こんな時代に演劇ですら救いがなかったらキツイなと思っちゃうので。そんな分かりやすいハッピーエンディングではないですけど(笑)。

昔から他人のツラさやコンプレックスに敏感だったのでしょうか。

少なからず自分にもコンプレックスはありますし、確かに苦しんでるひとを救い上げてケアしたいという思いもある。といいながらも、自分の残酷性や気づいているのに手を差しのべられない瞬間もあつて。いま個人的な事情や都合を天秤にかけているなとか、そういう偽善的な部分も全部作品に乗せていく。正義に辿り着かない葛藤、苦しみとか、そういうところも作品には混ぜて書いています。

逆に、作品を作る上で「これだけはやらない」ことは？

固有名詞をなるべく出さない。これは尊敬する劇作家の土田英生さんとも共通しているんですけど、土田さんよりルールは甘めです(笑)。できるだけ商品名、芸能人の名前とかは入れない。日常と地続きの所を描きたいんですけど、劇空間から逃げちゃうような安易な所に寄らないような台詞は意識して作っています。結局演劇で残るものって戯曲で、だとしたら 10 年後に開いても恥ずかしくないものにはしたいなと思っています。

「消耗しにくい演劇作品」として、再演への思いも感じます。

そこには強いこだわりがあります。自分がそこまで次々に新作を書ける作家じゃないということもあるんですけど、でも作品の使い捨てみたいなことや、作家自身も消耗していく感じとか、あまり良い状況にも思えなくて。日本の演劇界は新作至上主義ですけど、そこにはちょっとアンチでいたい。まずは、こういう作品を書いて欲しいと言われたら、「こういう作品があります」と過去の作品を出せるようにはなりたいです。



システムとして定着すると、状況も変わってきそうですね。

戯曲ってある種完成が見れないというか、いくらでもブラッシュアップできるもののような気がしていて。再演して戯曲の強度を上げていくとか、演出面でも新たなチャレンジができるので。必ずしも新作ということに価値を持つことだけが、良いことではないというのは、iaku を立ち上げた当初から思っていました。過去の作品を大切に、再演というものを大事にしながら進めています。

事実、iaku 旗揚げ公演『人の気も知らないで』は 10 都市以上、80 ステージ余りを行っています。

今は劇団ではなく役者だけのユニットが増えている中で、コンパクトな 3 人芝居は人数的にも装置的にもやりやすいという部分もあると思います。東京の小劇場の役者さんたちが「出たい」と言ってくれる。役者が出たいと思える戯曲を書けているというのは、自分の中でも成長できている部分かなと思います。『エダニク』という作品は初演からちょうど 10 年が経つんですけど、今年は映画監督の戸田彬弘さんや鄭義信さんの演出で上演されます。東京ではこの 1 年で 4 団体ぐらいが『エダニク』を上演してくれるんです。戯曲がちゃんとひとり歩きしてくれるのは、元々望んでいたことだったので。この状態をちゃんと継続していきたいなと思います。



『エダニク』では第 15 回劇作家協会新人戯曲賞を受賞されました。改めて作品をご紹介しますか？

舞台は東京近郊にある食肉加工場、屠場ですね。豚とか牛を解体して出荷するところで働く職人ふたりと、そこに豚を卸している業者の息子で新人社員の男3人の会話劇です。スーパーに並んでいる細切れ肉がどういう工程を通過して自分たちの所にきているのか、そういうところに意識が向くだけでも価値がある作品かもしれない。実際、生き物の命が食に変わっていく、“命を巡る物語”としてスポットがあたりやすい作品です。でも僕としては、あくまでも男3人の芝居というのが面白いなと思っていて。労働現場を舞台に3人がそれぞれの立場を守ったりしながら会話が進んでいく。立場の違いから発せられるヒリヒリとしたやり取り、それぞれの議論や考え方のぶつかり合いというのが、作品の強さかなと思っています。

『エダニク』は、初めて取材をして書き上げた戯曲だそうですね。

場所の特異性というか、無責任なことではできないなという思いもあり取材しました。この経験を通して、生の声とか当事者の切実な思いこそ、ひとが見つめるものなんじゃないかと思うようになりました。作家も観客も見つめたいものはそこなんだろうと。それ以降、取材は作品づくりで大事にしています。

また、お子さんの存在が作品に影響することはありますか。

そんなことないと思っていたんですけど、(影響が)あるみたいです(笑)。単純に子供がいなくて書いてなかったらと思う作品もありますし、例えば昨年12月に上演した新作『逢いにいくの、雨だけど』は子供の怪我がモチーフ。これは子供時代に友達同士のやりとりでひとりが怪我をして片目を失明してしまう。そういう過去を持ったひとたちが20数年後に出会う話なんですけど、自分の息子が学校で足を踏まれて親指の爪が割れる怪我をして、治った部分がボコッと隆起しているんですね。本人はそのことに対して何も

思っていない。でも親としては、一緒にお風呂に入ったりして目につくと「これは一生残る傷なんだな」と思ってしまう。そういうことがこの作品のモチーフにもなったので、影響はあるんだなと改めて気づきました。



取材や環境の変化に伴いご自身の中でも変化がある中で、今後の夢や目標は？

iaku の公演スケジュールを立てたり、外部の仕事の依頼などを見ていくと、自分が演劇の世界の中でこういうふうに進んでいくんだろうな、いけたらいいなというものは何となく見えてくる。そのために中劇場クラスでも堪えうるような作品づくりを意識的にやっていかなきゃいけないとか、かなり具体的なイメージを持っています。少なくとも自分が言い訳も妥協もしなくていい作品を、規模が変わっても発信し続けられたら良いなと思っています。

改めて、今まで演劇にはご縁がなかったという方にもメッセージを。

やっぱり一般のひとにとって劇場へ行くことは、特別なことだと思うし、僕はそれで良いと思うんです。そんな特別な空間に行って体験することってすごく稀有なこと。その場にいる数百人しか体験できないことを一緒に体験することに価値があると思うので。僕も高校生の時に初めて惑星ピスタチオの演劇を見た時はものすごく新鮮に感じました。今でも思い出せるぐらい。だから、あの感覚をこれから体験できる人がいるなんて羨ましい(笑)。そのファーストチョイスに iaku があったら嬉しいなと思います。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

万博公園にある岡本太郎が作った「太陽の塔」です。実家のベランダから見えるぐらい近くにあって、通っていた高校も太陽の塔のすぐそばでした。今は東京暮らしですが、活動の拠点は大阪ですし、車で帰省するときもまず迎えてくれるのが太陽の塔なので。塔が出来た大阪万博の時はまだ産まれていませんでしたし、塔の中にも入ったことはないのですが。自分にとっては太陽の塔が、大阪を象徴するものだかと常に思っています。

